

熊野の
木林から

清流の日置川には、子供を水中に引きずり込んで襲う河童「ゴライボー」が潜んでいるという。大川で暮らす河童のせいか、細流や溪流に棲む熊野の河童とは性質が少し異なっていて、むしろ紀ノ川の河童「ガタロ」と似ている。

旧・日置川町は現在では白浜町の一部となっているが、地名の通り、清流日置川の中々下流に位置している。日置川は、過去に幾度となく洪水、氾濫を繰り返してきたためか、水害の象徴でもある。蛇伝説や主の話が残る。また、ゴライボーという河童の話も残る。この名前は紀南全域の河童の名前と似ているが、性質はむしろ紀

怪熊野

「旧・日置川町の怪異」

其の(五)

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



ノ川の河童ガタロと同類のようだ。子供を川に引き擦り込み、尻子玉(しりこだま)を抜いてしまうという。

日置川の河童は、川を遡った市鹿野付近ではカシラン

ポと呼ばれ、人を化かしては脅かす。さらに上流の旧・大塔村や中辺路の近露(ちかつゆ)の河童

は、他の熊野エリアの河童と同様、人に退治されたり、冬に山に登ったりするなど、中・下流のゴライボーやカシランポとは性質が異なっている。

中流のロケ谷には、大正時代に天狗と過ごした徳兵衛、徳松、あるいは徳蔵と呼ばれた人の話が伝わる。ある日のこと、働きの徳兵衛が日置川へ降りていったまま行方不明となる。前日の大雨の増水で川に流されたと皆は諦めたが、四、五日後に戻ってきた。村人は徳兵衛に事情を問いかけるも、徳兵衛は返事をしないし、どうも様子がおかしい。働き者だった徳兵衛は全く仕事をしなくなり、夜になると山に行つては、そのまま三日も四日も帰らない日々が続いた。帰つ



ロケ谷には大正時代に天狗と過ごした徳兵衛、徳松、あるいは徳蔵と呼ばれた人の話が伝わる。その天狗は、日置川沿いの山中に棲んでいて、様々な役に立つ術を持つ知恵者であるという。

た時には着物はぼろぼろ、体中は傷だらけ。村人は不思議がった。ある日のこと、徳兵衛がみんなに話したいことがあるというので、村人たちは徳兵衛の家へ集まった。徳兵衛が言うには、川に流されたところ山の天狗に助けられ、友達になり、いろいろな術を教わったとのこと、その後は役に立つ術をみんなに教え広めた。これに感謝した村人は、徳兵衛の功績を称え、祠を建て「天狗まつり」をするようになったという。大正時代という、ほんの100年前のことである。そんな時代に天狗と交流を持った人が居たことは実に興味深い。また、ロケ谷付近には熊野古道の大辺路が通っており、そこには旅人に取り憑いては行き倒れにしてしまうダルが潜んでいたという。ダルは、熊野の山中のいろんな場所で確認される妖怪だ。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

